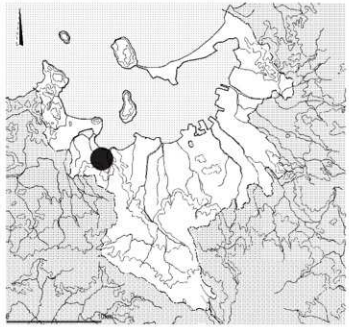
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1222集

今宿五郎江 17

― 今宿五郎江遺跡第16 次調査報告 ―



調査番号 1220
遺跡略号 IZG-16

2014

福 岡 市 教 育 委 員 会

今宿五郎江17 ― 今宿五郎江遺跡第16次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一二三三集　二〇一四　福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1222集

今宿五郎江17

― 今宿五郎江遺跡第16次調査報告 ―

2014年３月24日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印刷　株式会社西日本新聞印刷

序

福岡市の西端に位置する今宿平野は、歴史的にみても重要な位置にある地域です。

福岡市では、工事等により現状での保存が不可能となった埋蔵文化財について、記録による保存を図ることとし、そのための発掘調査を行ってきました。本書は、この目的で西区今宿町地内において実施した今宿五郎江遺跡第16次調査の報告書として刊行するものです。

本報告の刊行は、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解と多大なご協力の結果であることをここに記し、心からお礼を申し上げます。また、本書が今宿平野の歴史について、理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長　酒井龍彦

はじめに

1　本書は、2012(平成24)年度、福岡市西区今宿町137番地内で福岡市教育委員会がおこなった、今宿五郎江第16次調査の報告である。

2　発掘調査は、文化財保護法94条に基づく通知を受け、埋蔵文化財保存についての協議を行った結果、福岡市こども未来局こども部放課後こども育成課の依頼により、記録保存を目的として、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課が担当した(平成24年度、組織改編により教育委員会から移管)。作業は、関係各位のご理解とご協力のもと、円滑に遂行することができた。この場で深く感謝申し上げる。

3　発掘調査・報告は埋蔵文化財調査課 杉山富雄が担当した。

4　出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡例

1　位置の記録は、伊都土地区画整理事業に伴い設置された基準点（日本測地系）を利用した。ちなみに、調査地点内の基準点X+63540.000/Y-67290.000は、世界測地系ではX+63913.124/Y-67510.838となる(TKY2JGDによる)。また、巻末抄録中の位置は世界測地系による。

2　報告中の遺構・遺物番号は、それぞれ登録番号を用い、調査現場での記録から整理、収蔵まで一貫して管理し、台帳・図・日誌等関係に記載した情報と極力関連づけておくことに努めた。記述中必要に応じて、遺物には「R」、遺構には「M」を付した。

遺跡調査番号	1220			調査略号	IZG-16
調査地籍	福岡市西区今宿町137番地内			分布地図番号	112
工事面積	231㎡	調査対象面積	231㎡	調査面積	203㎡
調査期間	2012(平成24)年10月6日～2012(平成24)年10月25日				

本文目次

1今宿五郎江遺跡第16次調査の概要 …… 1
(1)発掘調査に至る経緯 …… 1
埋蔵文化財事前審査・発掘調査の実施
(2)発掘調査の概要 …… 1
(3)遺跡の立地と既往の調査 …… 1
遺跡の立地 …… 1
既往の調査 …… 1
調査区の土層と立地 …… 3
2 今宿五郎江遺跡第16次調査出土の遺構と遺物 …… 5
調査成果の概要 …… 5
掘立柱建物 1 …… 5
溝 12 …… 6
その他の遺構 …… 6
今宿五郎江第16次地点採集遺物 …… 7
調査区採集遺物の包蔵位置 …… 7
3 まとめ …… 9

図目次

図 1 調査地西方の景観 (東から) …… iv
図 2 調査地東方の景観 (西から) …… iv
図 3 今宿五郎江遺跡第 16 次地点位置図 (1:50,000) …… 1
図 4 今宿五郎江遺跡調査区 (1:2,000) …… 2
図 5 調査地と周辺景観 (東から) …… 3
図 6 今宿五郎江遺跡第 16 次調査区全体図 (1:1 00) …… 4
図 7 掘立柱建物 1 (1:40) …… 5
図 8 溝 12 (1:40) …… 6
図 9 今宿五郎江第 16 次調査出土遺物 (1:4、1:2、1:1) …… 8
図 10 今宿五郎江第 16 次調査出土遺物 …… 8
図 11 今宿五郎江第 16 次地点位置図 (1:4,000) …… 9
図 12 1 区全景 (東から) …… 10
図 13 2 区全景 (東から) …… 10
図 14 調査区西壁土層 (東から) …… 11
図 15 調査区南壁土層 (北から) …… 11
図 16 調査区東壁土層 (西から) …… 11
図 17 柱穴 2 土層 (東から) …… 11
図 18 柱穴 3 土層 (北から) …… 11
図 19 掘立柱建物 1 (北から) …… 12
図 20 掘立柱建物 1 (東から) …… 12
図 21 溝 12 (南半部、北から) …… 13
図 22 溝 12 (北半部、北から) …… 13

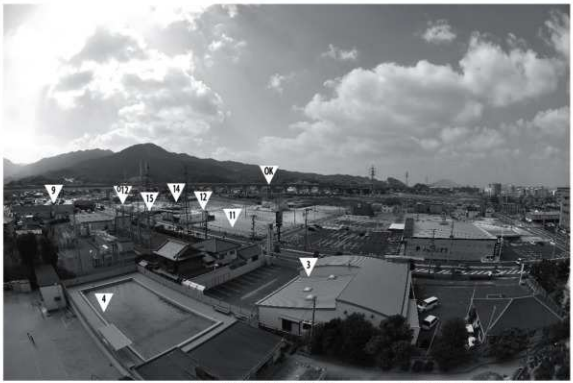


図 1 調査地西方の景観（東から）

数字 今宿五郎江遺跡調査地点。
O12 大塚 12 次調査地点
OK 今宿大塚古墳

図 2 調査地東方の景観（西から）

1 今宿五郎江遺跡第 16 次調査の概要

(1) 発掘調査に至る経緯

埋蔵文化財事前審査　2012(平成 24) 年 5 月 22 日、こども未来局放課後こども育成課から、西区今宿町 137 番地地内 (今宿小学校校地) における留守家庭子ども会施設新築について、埋蔵文化財事前調査の依頼があった。

埋蔵文化財事前審査課では、計画地が今宿五郎江遺跡内に位置することから、試掘調査により、当該地の埋蔵文化財の有無、内容を確認することとした。その結果、工事計画範囲内に埋蔵文化財が包蔵されていることを確認した。このため、工事担当課と設計変更等、埋蔵文化財の現状での保存についての方策を協議をしたが、計画工事の埋蔵文化財に対する影響を回避できないことが判明した。このため、工事計画範囲の埋蔵文化財については、記録による保存の方策をとることとなった。

発掘調査の実施　以上の様な経過を経て、発掘調査は、放課後こども育成課からの依頼に依り、埋蔵文化財調査課が担当して実施することとなった。

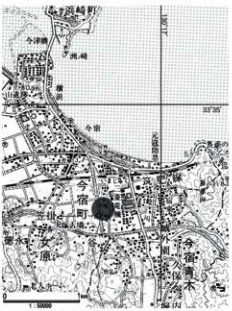


図 3 今宿五郎江遺跡第 16 次地点位置図 (1:50,000)

(2) 発掘調査の概要

発掘調査の実施のあたり、調査地点が、今宿小学校校地内にあり、運動場に接する位置で廃土置き場が限られたことと、調査地が盛土造成された場所であったことにより、廃土量が予想外に増えた。このため、2区に分割し廃土を反転して調査を行うこととなった。

発掘作業は、2012(平成 24)年 10月 9日着手した。機力により南側から表土鋤取りを進め、調査対象範囲のおよそ 2/3の範囲について表土の鋤取りを行い、1区とした。鋤取り時、盛土の大部分が大径の砕石を利用して行われていることが判明し、調査区壁の肌落ち、崩落の危険が予見されたため、調査区壁に勾配をとりながら進めた。

10月 18日、廃土を反転、残る部分の表土を鋤取り 2区を設定した。2区調査中に今宿小学校 6年生 4組約 120名の見学があった。調査を終え、埋め戻しを 10月 23日から行い、10月 25日機材を撤収して現場作業を完了した。整理作業は平成 25年度の実施となった。

(3) 遺跡の立地と既往の調査

遺跡の立地

今宿五郎江遺跡は、糸島平野の東端部、通称今宿平野に位置する。今宿平野では、高祖山麓から今津湾に向かって延びる丘陵の末端部に台地が発達する。今津湾沿岸には、博多湾奥に通有の陸繋砂州起源の砂丘が発達する。今宿平野前面は、その砂丘により閉じられた潟湖の痕跡である低湿地が広がり、遺跡の中央部の砂礫台地は、その中に突出するような位置にある。遺跡の範囲はその台地と周縁の微高地、東西に深く入り込んだ谷の一部に及ぶ。地形の全体は、北へ緩く傾斜し、現況の高度は中央部の最高所で標高 8m、西側微高地部で 4mの等高線が引かれている。

既往の調査　(図 4)

今回調査した今宿五郎江第 16次調査地点周辺では、西に近接して第 3次、南に今宿小学校校地内で

図4 今宿五郎江遺跡調査区 (1:2,000)

第5次調査が実施されている。また同校地内では、北へ離れて第1次地点がある。

第3次調査　900㎡を調査した。調査面は標高4.5m前後の位置にあり、台地周縁の平坦面に立地する。調査区北側へ延びる溝、調査区東から西へ抜ける溝、竪穴住居、掘立柱建物、土壙が遺存している。このうち、竪穴住居から古墳時代後期の土師器が出土したほかは、土器は、弥生土器が出土する。東西方向の溝では中期後葉～後期前葉とされる土器が大量に投棄されていた。

第5次調査　3次地点の東で、同地形面上に位置する。150㎡の調査区に3次地点の東西溝へ続くと思われる溝、及びそれと平行して1条の溝が遺存する。周辺の土壙は中世輸入陶磁器を出土して新しい。調査面の標高5m程である。

第1次調査　やや離れて北に位置に立地する。他2地点とは異なり、台地上に立地する。調査では、261㎡の調査区で弧状の溝、土壙といった弥生時代の遺構の他、古墳時代、中世の遺構を検出した。

調査区の土層と立地　（図14～16）

調査区は、現況地表の標高6.2m程で、前述したように校地造成のため厚い盛土で覆われている。

図15に南壁断面を示す。西3/4を砕石で、残る東部を土で盛土している。写真には見えないが、この境界部に擁壁構造物が残り、現況校地以前の盛土の位置を示している。この2度にわたる盛土工事は、同一の田面に直接盛土したこと、水田が本地点より東へ広がっていたとも分かる。西壁断面（図14)には田面、畦が明瞭に残っている。調査区位置図を、1947年米軍撮影の空中写真に重ねてみると、古い擁壁の位置が校庭の西辺部に一致し、既にこの位置まで造成されていたことが分かる(図11)。

水田耕作土(2層)・床土(3層)下は、灰黄褐色(10YR 5/2)粘土味のあるシルト層(4層)で、厚さ0.2m、下位地山層を覆い、その境界面は波状となっている。境界は不明瞭。現況地形の基盤を成す層で、第11次調査区を含めた谷部から連続して分布するものと思われる。

地山層とするのは粘土味の強いシルト層で褐色(10YR 4/6)を呈す(5層)。南東隅の調査面には、5層下の層が現れている。明瞭な流理がみられる粗砂層で、基盤礫層の一部で、地形の立ち上がり始める部分に当たる位置を示すものと思われる。

このような状況からすると、本地点は、遺跡中央部の台地裾部、あるはその近くに位置しているものと思われる。調査面の標高からして、間に谷が入り込んではいるが、第11次調査地点から広がる北に緩い勾配をもった台地平坦面の東縁部に立地していたと考えられる。

図5 調査地と周辺景観（東から）

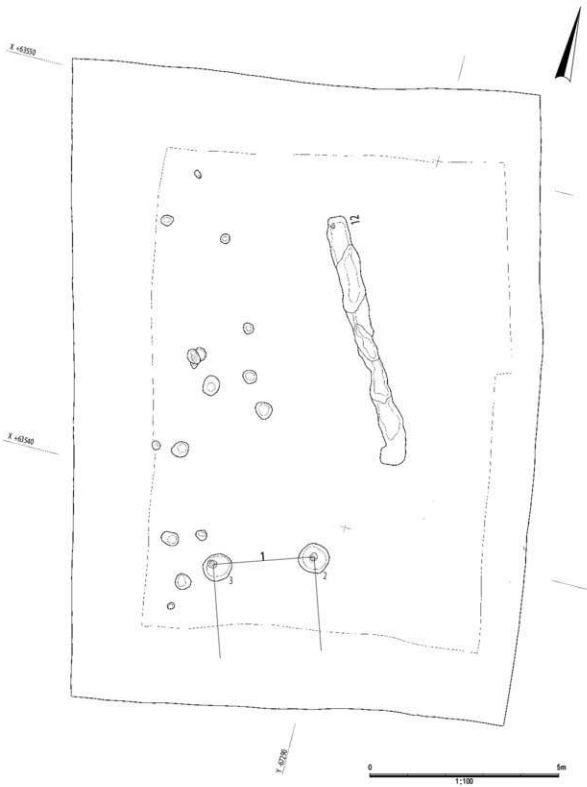


図6 今宿五郎江遺跡第16次調査区全体図 (1:100)

2 今宿五郎江遺跡第 16 次調査出土の 遺構と遺物

調査成果の概要

今回調査では、全体で 203㎡となった。調査面の位置は標高 4.6m程で、褐色粘質土を地山層とする。地山面は、ほぼ平坦で、西側に寄って遺構が分布していた。遺構は柱穴 3基、及びそれが構成する掘立柱建物 1棟、溝 1条、小穴を検出調査した。遺構、調査面からの出土遺物は少量であったが、表土鋤取り時、清掃時に表土層から弥生土器の出土があった。

掘立柱建物 1（図 7･17 ～ 20）

調査区南辺部に位置する。調査区外へ延びると考えられる建物である。調査では建物を構成する柱穴 2基 (柱穴 2･柱穴 3)を検出した。柱穴平面形はよく似たものであり、いずれも規模が大きい。各柱穴で柱痕跡が明瞭に遺存することから、それによる柱間を計測すると 2.7mとなる。確認した柱穴の形状、規模、柱間隔を考え合わせると、1間× 1間の構成で正方形、若しくは、柱穴 2～柱穴 3を桁行にとる長方形、あるいは梁行として、桁行 2間の平面形をもつ建物を想定することができる。なお、建物軸の方向は柱穴 2･柱穴 3からすると、北から 62°東方向若しくは、北から 18°西方向となる。以下、個別の柱穴について記述する。

柱穴2 平面不整な円形状を呈し、断面はやや逆台形状、底面は丸みをもつ。中央部に位置する柱痕跡は中位以下で明瞭となり、断面でも確認できる。底面には明瞭に柱圧痕が認められる。柱穴は塊状の地山土で埋め、間隙を暗褐色粘質土 (10YR 3/4)が充填する。柱痕跡覆土は暗褐色土である。柱穴の規模は径 0.8m、深さ 0.4mを測る。遺物は、埋土中から少量の土器体部細片及び、剥片類が出土した。土器には器形の判別できる資料は含まれていなかった。

柱穴3 平面不整な楕円形状となる。断面形は、柱穴 2と同様底部は丸みをもつ。柱痕跡は調査面、断面とも明瞭で、柱穴底面に柱圧痕が明瞭である。柱痕跡が示す柱の位置は、対する柱穴 2とは遠い側の端に寄った位置となる。柱穴埋土は塊状の地山土を主とした部位と、暗褐色粘質土が主となる部位とが層状に重なり合った状態を示している。柱痕跡も半ばは地山土塊で埋まっている。

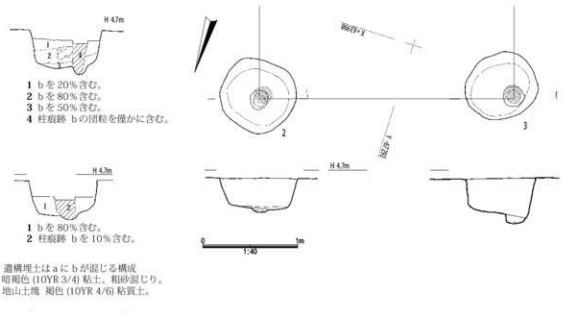


図 7 掘立柱建物 1 (1:40)

覆土中から土器体部細片が少量出土した。器形を復原できる資料は出土しなかったが、土製品とする資料が出土した。

柱穴3出土遺物（図9・10）　土製品33「く」の字形に折れ曲がった形状で、断面丸みを帯びた四辺形となる資料である。片側が失われている様にみえるが、端部を丸く収めており、現状で完形の資料とみえる。器表を失った断片資料、あるいは焼土塊かとも考えたが、表面に指押さえ痕が残り、指紋もみえる。器表は遺存して、現状の形状に整形されたものと考えられる。焼け締まっておらず、軟質である。胎土は緻密、粗砂～細礫を含み、器表にぶい黄橙色(10YR 6/3)を呈する。長さ6.1cm、断面の縦3.9cm、横2.9cm、重量57g。

溝12（図8・21・22）

北からやや西へ振れた方向に直線状に延びる溝である。調査区外へは伸びない。全長6.7m、幅は0.6mを前後する。底部は、起伏が著しく、最も深い位置で深さ0.2mを測る。全体にごく浅い。覆土は褐色(10YR 4/4)シルトで、地山土塊(褐色7.5YR 4/4)を挟んでいる。遺物は覆土中から土器細片が散漫に少量出土した。

溝12出土遺物（図9・10）　土器はいずれも器表が著しく荒れ、後述する1点以外は、器形を復原できる資料は含まれていないが、なかに後期以降に特徴的な大形甕もしくは壺の口縁部極細片が含まれている。

弥生土器35は、甕底部小破片である。底面は僅かに凸面となっている。器表荒れて詳細不明だが、底部付近には指押え痕が連続する。胎土に砂粒を顕著に含み、細礫が混じる。外面は赤化(明赤褐色　2.5YR 5/6)し、内面は浅黄橙色(10YR 6/4)を呈す。

その他の遺構（図9・10）

調査区西半部に小穴が分布する。密度は小さく、小径である。覆土は暗褐色または黒褐色の粘質土であるが、柱穴とするものは、柱穴2・3の他は1基のみであり、樹根痕跡が含まれている。

半ば以上の小穴から遺物が出土しているが、いずれも弥生土器と思われる極細片の土器である。

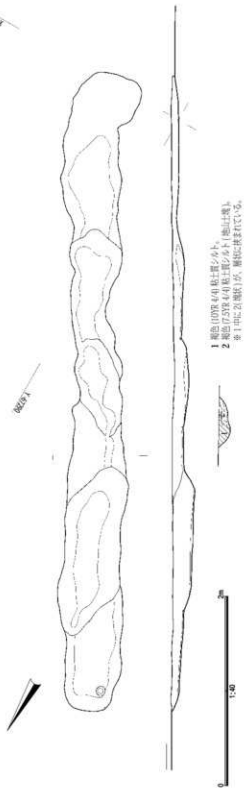


図8 溝12 (1:40)

今宿五郎江第16次地点採集遺物　(図 9･10)

今回表土採集遺物のうち、図示できる資料を以下に示す。採集遺物のうちの多くは盛土層出土資料である。

弥生土器 40は、甕口縁部細片資料で、器表著しく荒れ、口縁端部を欠失するが、鋤先状口縁であことは分かる。口縁直下に低い断面三角形の突帯がある。器表は荒れて、調整の詳細不明。胎土に粒状性あり、細礫を含む。器表は橙色 (7.5YR6/6)を呈す。口径は 23.5cmを復原できる。弥生時代中期。

弥生土器 37は甕口縁部細片で、あえて復原してみたが形状は不確実。口径がより大きな器形か。胎土に粗砂粒 (花崗岩)を顕著に含み、断面団粒状を呈す。器表はにぶい黄橙色 (10YR6/4)。器表荒れて調整不明。

弥生土器 38は壺の胴部細片である。外面は、斜め方向細目の刷毛目調整後、突帯を貼り付ける。遺存部分で 3条、凸帯を胴部最大部に貼り付ける。断面では、上方に押し上げたような形状となっている。外面に赤色顔料塗布 (明赤褐色 2.5YR 5/8)。内面は板状の工具による調整か、鏡状の圧痕が残る。器表橙色 (7.5YR 7/6)。胴部径 19.5cmを復原する。

弥生土器 39は、壺底部細片である。内外面荒れて調整不詳だが、底部内面に凹面が残り、指押え調整を行ったものか。胎土の基質は緻密だが粗砂を小量含む。外面は橙色〔2.5YR 6/6〕を呈し、内面は黒化する。底径 4.7cmを復原できる。

石鏃 2は縄文時代の剥片鏃である。他資料と異なり、水田床土層から出土した。素材黒曜石剥片の打面側を欠き取り、抉りを加えて基部とし、対する側の両側辺に鋸歯状の剥離を行ない、尖端部に整形する。先端部を欠く資料で現状の長さ 2.7cm、幅 2.2cm、厚さ 0.4cm、重さ 1.5gを測る。石材黒曜石は透明で、雲状斑がみえる。今回調査では縄文土器の出土はなかった。

調査区採集遺物の包蔵位置　(図 11)　表土層採集遺物とするものの多くは、盛土層中の褐色粘質土出土であり、近隣を掘削、盛土に利用した結果かと思われる。それは、先述したように、1947年までに施工された校地造成工事によるものである。

ところで、現在の運動場は、1947年当時の 2倍ほどの面積がある。校舎の大方の位置に移動はなく、当時、校庭を南側に、変電所用地との間にあった畑地まで拡張した結果である。また現在、校舎敷地と運動場とでは顕著な高低差はなく、空中写真撮影時から運動場の高さに変化は無いものと思われる。

現地形は、校地南端部が最高所となる。地形図ではその南側、変電所敷地の地盤高に 7.9mの表示があるが、現状は校地側がやや高い。この位置では段丘礫層面が露出しており、旧状を保っているものと考えられる。運動場は現状で 6mの表示があり、両地点の間でおよそ 2m差がある。空中写真の観察では、1647年時点には、校庭から変電所までの間に東西方向の低い段が 2箇所平行して認められる。この段差と、畑地の成す緩斜面により、北の運動場へ向かって高度差を下っていたものと考えられる。この範囲を、現在の運動場の面まで切り下げたのは、戦後のこととなるが、1969年測量になる福岡市都市計画図では、運動場は現状の範囲まで拡張され、第 16次地点の新規盛土 (調査区西側まで)も完了しており、同時に施工されたものかもしれない。

以上のように、今宿小学校校地、特に運動場については、少なくとも 2度にわたり台地部の削平を伴う造成が行われている。今回調査採集資料については、旧期の造成に伴うと思われる盛土に含まれる。そして、その包蔵地は、現運動場の北半部にあったものと考えられる。

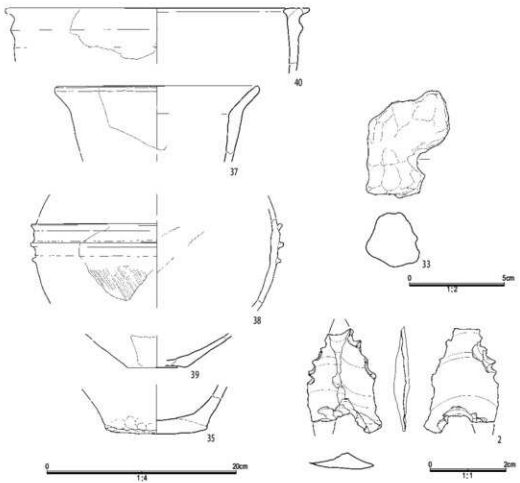


図 9 今宿五郎江第 16 次調査出土遺物 (1:4・1:2・1:1)

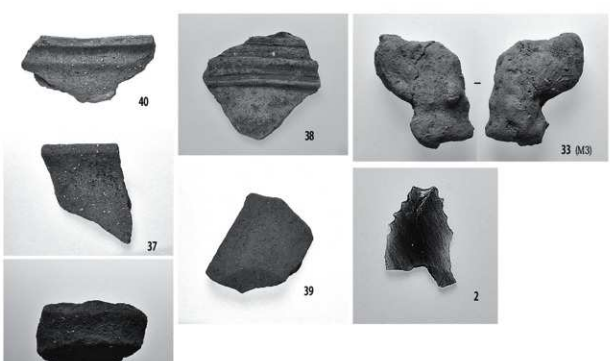


図 10 今宿五郎江第 16 次調査出土遺物

3 まとめ

今宿五郎江遺跡は、中央の一段高い台地部と周辺の低い台地部、谷部の一部を含む範囲を占めている。周縁部の台地は、遺跡東・南側ではごく狭いが、西側に広く広がっている。

今回調査した第 16次地点はそのうち、西に広がる低い台地部の東辺部、中央台地の裾部に当たる位置に立地する。調査区東側で地形の立ち上がりが予測され、遺構も調査区の西に偏り、分布の密度も小で、西に位置する第 3次地点のそれと大きく異なり、同位置とみる第 5次地点と似る。遺構は、低位の台地上に広く分布する掘立柱建物、溝の広がりが中央台地裾部まで及ぶことを確認できた。

ここまで、今宿五郎江遺跡について行った 16地点に及ぶ調査のうち、中央台地上では、北部で第 1次調査、第 6・7次調査が行われ、第 1次地点で、調査者が環濠を想定する弥生時代の溝を確認した。しかし、遺跡中央の台地高所部 (今宿小学校運動場から南側の、現変電所敷地及び周辺)について発掘調査は行われていない。過去の試掘調査、工事立ち会い時の見分等によると、変電所内及び南の住宅地では、おそらく Aso 4火山灰層とみられる強い粘土質の褐色土が分布し、部分的に基盤礫層も現れている。ただし遺構の検出例は無い。

また今回、今宿小学校校地内における地形改変を検討し、運動場の南半部、特に南辺部は大きく削平されて、遺構の遺存しない範囲が生じていると予想できる。一方、運動場北半部以北については、改変の時期が古く、その程度が不明であるが、第 1次地点の調査面高度が 4.5m辺にあり、現校地の地盤高 6m前後であること、地形は北へ勾配することを前提とすると、遺構の遺存が予想できる。

第 11図に、1969年撮影、1981年修正の都市計画図を基盤に 1947年時点の現況写真と、今宿小学校の現校地範囲(白線)、を重ねてみた。これから、これまで述べてきた調査地点と、地形との関係を見て取ることができる。

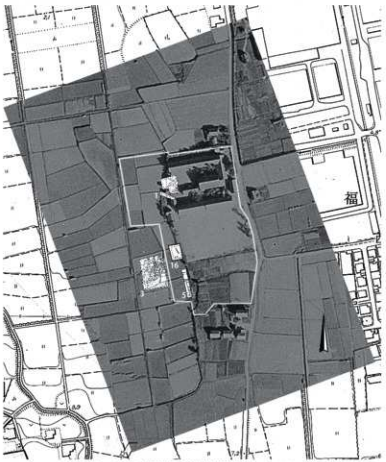


図 11 今宿五郎江第 16次地点位置図 (1：4,000)

ついでながら、第 5次地点の南溝(SD1)の位置が、中央台地裾部が凹地状を成し (等高線の凹部)、台地上では北へ下る段差と一致した位置にある。溝がそのまま台地を横断する方向に掘削されていたものかは不明であるが、第 5次地のそれから西へ下ると考えられる第 3次地点の溝 (2号溝)との溝底高さの比高は両端部で 1.7mあり、台地上へ登る勾配を考えても不自然ではない。この溝には弥生土器が投棄されているが、その投入方向は両地点とも南からと観察されている。これも、地形と整合する。

図12 1区全景（東から）

図13 2区全景（東から）

図 14 調査区西壁土層（東から）

図 15 調査区南壁土層（北から）

図 16 調査区東壁土層（西から）

図 17 柱穴 2 土層（東から）

図 18 柱穴 3 土層（北から）

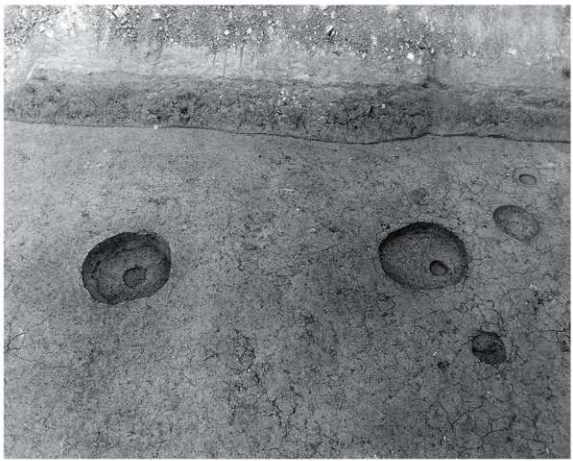


図19 掘立柱建物１（北から）

図20 掘立柱建物１（東から）

図 21 溝 12（南半部、北から）

図 22 溝 12（北半部、北から）

報告書抄録

ふりがな	いまじゅくごろうえ 17
書　　名	今宿五郎江 17
副 書 名	今宿五郎江遺跡第16次調査報告
巻　　次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1222
編集者名	杉山富雄
編集機関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号　TEL092-711-4667
発行年月日	2014年3月24日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		㎡	
今宿五郎江16次	福岡県 福岡市西区 今宿町	40130	626	33° 34′ 30″	130° 16′ 22″	20121009 ～ 20121025	203	記録保存調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今宿五郎江11次	集落	弥生	掘立柱建物、溝	弥生土器、石器	

要　約	今宿五郎江遺跡中央台地部に接する地点の調査を行い、台地縁辺部の遺構分布範囲を確認した。遺構の内容は周辺微高地のそれにつながるものである。また、台地の範囲、台地上の改変の経緯、程度について情報を得ることができた。